

《史料紹介》

## 明治後期の岡山県南部における農村生活

——佐藤悦太郎『ある老人の思い出の記』の紹介——

神 立 春 樹

### 目 次

- 1 はじめに
- 2 村の風景・四季
- 3 家族と家業
- 4 こどもの生活
- 5 学校生活・時代の投影
- 6 村人の生活

### 1 はじめに

小論は、佐藤悦太郎氏の記録を紹介し、それを通じて明治後期・大正初期の農村生活の具体像を示すものである。

佐藤悦太郎氏は1900（明治33）年8月22日に岡山県都窪郡早島町の畑岡に生まれた。生家は、水田7反歩、畑1反歩ばかりを自小作する農家であった。1907（明治40）年4月早島尋常小学校に入学し、1913（大正2）年3月卒業した。引き続き同年4月開成高等小学校に入学したが、健康を害して同年中に退学した。1915（大正4）年より家業、すなわち、農業及び蘭蓴製造に従事した。戦後、早島町議会議員、早島町蘭草蘭製品農業協同組合長などを歴任した。1997年に死去。

佐藤悦太郎氏は晩年になって多くの記録を書きとどめているが、『ある老人の思い出の記』、『ある百性の日記』が明治後期から大正期の農村生活を記すものとなっている。

『ある老人の思い出の記』は1984（昭和59）年11月28日付のはしがきがあり、全49丁、B 4 判に手書きの謄写印刷二つ折り、B 5 判の大きさに表紙をつけて綴じたものである。第1丁にある目次の上に「明治35年から大正3年末まで」とあり、はしがきには、「このある老人の思い出の記は、私が生れて二年四ヶ月のとき、氏神鶴崎神社の社頭で神主さんが頭の上で振ってくれた金幣の音に初めて自分といゆものを知ってから、大正四年一月一日村の青年団に入るまでの拾三年の間で特に印象に残ったものを収載したものである」とあり、15歳までの幼少年期、1915（大正4）年に青年団に入って家業の農業に取り組むまでのものである。

『ある百性の日記』は1984（昭和59）年12月15日付のはしがきがあり、全53丁で、同じくB 4 判に手書きの謄写印刷の二つ折りB 5 判の大きさである。通しの丁数が付してあるが、「ある百性の日記」と「ある老人の思い出の記」からなっている。「大正4年1月から昭和3年初め頃まで」（表目次）、あるいは「大正4年1月から昭和2年終り頃まで」（裏目次）とあって、『ある老人の思い出の記』の後の時期のものである。従事した農業・生業についてのものを取り出して独立させ、それとそれ以外についての二つにわけた続篇である。『ある老人の思い出の記』は農業に従事していなかった時期のもので農業についての記述は多くないが、『ある百性の日記』は農業に初めて本格的に従事したことからはじまる農作業や家業の蘭庭生産作業に関する記述である。

ここでは、この佐藤悦太郎氏の記録を紹介し、これらを通じて当時の状況を示したい。

なお、ここでの『ある老人の思い出の記』、『ある百性の日記』からの引用などは、前者については＊、後者は＊＊をもって表示し、数字は丁数を示

す。

## 2 村の風景・四季

### (1) 早島町

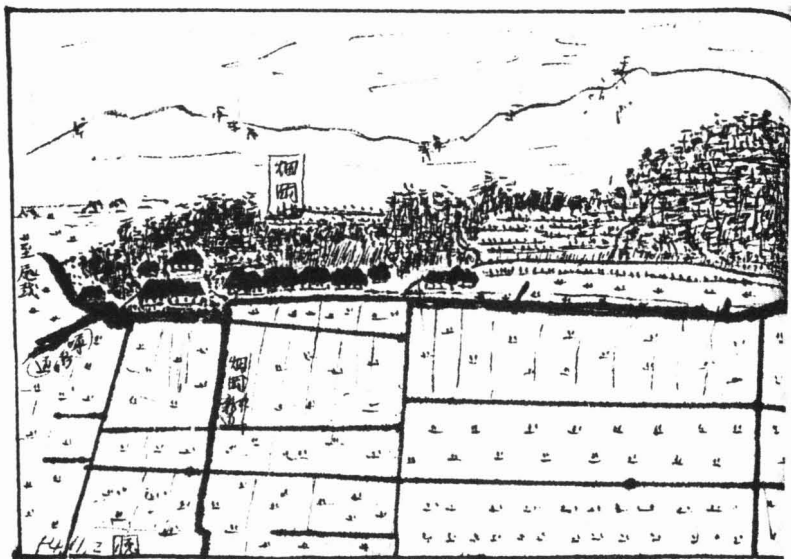
佐藤悦太郎氏の生れ育った早島町は、岡山平野の中央部に位置した都窪郡の東南部にある。1889（明治22）年に前潟村、矢尾村、早島村が合併して早島村となり、1896（明治29）年町制をしいて早島町となった。以来町村合併せずに今日に至っている。岡山・倉敷の両市に挟まれた町である。町域の北部は備南台地などの低い丘陵地で、北部の丘陵地のほかは、総て平坦の平野で肥沃、気候は常に温和である。江戸時代から蘭草の栽培と畳表の生産、その集散地であり、「早島表」というブランドで名高かった。ここで検討する時期には花菱が大きく展開し、畳表と花菱の町であった。水稻、蘭草栽培で岡山県の中心地域となる裕福な田園地帯であった。

金毘羅往来が南北に貫通する早島は早くから交通の要衝で、中心部は市街を形成し、市街の南端を東西に貫通する宇野線に早島駅がある。

なお、岡山市と倉敷市の中間に両市に接する位置にある早島はその工業化・都市拡大化により住宅地化が大きく進み、また、瀬戸中央自動車道、山陽自動車道と国道二号線が接続する早島インターチェンジの設置という幹線道路網の影響により、就業・産業構造も大きく変化した。このようなことにより耕地の壊廃が進み、農業は大きく衰退した。<sup>(1)</sup>

### (2) 村の風景・四季

佐藤悦太郎氏はこのような早島町の町場から2 kmくらい北西にある純農村部の農業集落の畑岡で生まれ、そこで一生を送った。図は佐藤悦太郎氏による明治末頃の畑岡集落の遠望図であり、写真は30数年前という写真である。いつから30数年前かは明らかでないが、1950年代のものと推定できる。



第1図 明治末年頃の畑岡集落（佐藤悦太郎氏製作）

註1）佐藤悦太郎『長津と写真でみる古田』37ページ。

2）原図は彩色，本図は原寸の65%縮小。



畑岡集落（佐藤悦太郎氏撮影）

「これは藺草が盛んに栽培されていた頃の写真である。もう三十数年前のものであるが、部落の前面はすべて藺田である。家の配置は現在も余り変わらないが、兎角この藺草の作付状況を見てもらいたい」。（佐藤悦太郎氏説明文）

註1）佐藤悦太郎『長津と写真でみる古田』53ページに貼付。

2）上図の左から二つめの道から撮ったものと思われる。

村の風景・四季をつぎのように描写している。

畑岡について

ここは後ろは畑の点在する松林の丘陵が連なり、前は一面の田圃がはるか児島の山裾まで続き、春は百花がりょうらんと咲き乱れ、秋は黄金の波がただようのどかな郷である。<sup>\*2</sup>

月の無い夜は暗かった。夜道が暗く、キツネやタヌキが人を化かす、化物や幽霊の話を聞かされて、夜、外へ出るのが恐かった。<sup>\*8</sup>しかし、

それでも田舎の四季は楽しかった。春には野山にいろいろな花が咲いて、天には鳥が鳴いて、山にはワラビが生え、畑の崖には野いちごが赤く熟た。夏の夜は蛍が飛び、昼にはトンボつり、セミやキリギリスが泣く。秋には七草が粧いをこらし、たけ狩りも楽しめる。冬は家の内でオヤツを食べながら、コタツにはいつて火鉢のそばで遊ぶ。さういう環境で私は日々をすごした。<sup>\*8~9</sup>

この田園地帯には多くの植物が生え、多くの鳥や虫や魚が生息していたであらう。記述には、春は百花りょうらん、秋は黄金の波、春は野山いろいろの花、とその風景を描くなかで、草花としては、山はわらび・畑のがけには野いちご、秋は七草・たけ刈・よもぎ・柏の葉、そして、スマレ・タンポポなどという植物が出てくる。<sup>\*8~9</sup><sup>\*12</sup><sup>\*\*4</sup>

鳥・虫では、虫についてはトンボ・セミ・キリギリス、ずい虫、コガネ虫などである。<sup>\*9</sup><sup>\*30</sup><sup>\*\*17, 19</sup>

川や水場のものは、魚類や虫の記述はなく、わずかに蛭がある。<sup>\*30</sup>

### 3 家族と家業

#### (1) 家族

悦太郎は1900(明治33)年8月21日にこの畑岡に生まれた。「家は田七反たらず、畑一反ばかりを自小作する小農であった。七人兄弟の四人目に生れた

が、上の三人はみんな女で、下はちょっと間があったので、小学校に入学するまでは、この三人に遊んでもらったり、また、いろいろ世話をしてもらった<sup>\*2</sup>と記している。

父親は1867（慶応3）年の生まれで、35歳のときに悦太郎が生まれた。<sup>\*12</sup>この父親についてつぎのように記している。

その頃の人にはめずらしく、よく字を知っていて書くのも上手であった。よく近所の人に頼まれて手紙を読んであげたり書いてあげたりしていた。

本も読むのも好きで貸本屋から講談の本などを借って来て、夜、行灯の向こうがわに寝そべって読んでいた。また俳句か何かをつくっていた（父さんが昔読んだ本も今でも三、四冊もっているが、続け字が多くてなかなか思うようによめない）。酒は呑まなかったが、その代り、煙草はよくすっていた。いつもたばこ盆をそばにおいてキセルでコチコチ音をたてながらすっていた。家で藁仕事などするときはマッチをするのが面倒だといって輪線香に火をつけて火鉢に入れてそばにおいていた。<sup>\*12</sup>

氣だてのよい父さんで、村の人や近所の人にも好かれてよく連れだって神様や大師さまにも詣る信心な父であった。<sup>\*13</sup>

母については、

お母さんは字を知らなかった。そんなおかあさんが家でヒメをつむぐ（表のたて糸）ときにはよくそばに行って、姉さんの古い本で本を読むけいこをした。

本の絵を見てはこれは何という字と二人で考えながらけいこをした。かあさんはその時は覚えていてもすぐ忘れてしまう。

僕は姉さんのべんきょうするそばでけいこをして学校に入学するまでには二年生の本を全部読み書きできるようになった。

母さんは「よく勉強する子は終いには頭をわずらって早く死ぬる」といって勉強することを喜んでくれなかった。

それは母さんの親類に頭のよい子がいたが、後に頭の病気をわずらって早く死

んだ、ということからであった。しかし平素はやさしいよい母であった。<sup>\*13</sup>

小学校の卒業を控え、高等小学校への入学の話がでたとき、母親から、「もう高等へは行くな」といわれたが、大きい姉の説得で高等小学校に行くことになった。<sup>\*42~43</sup>

姉たちについて、つぎのように記している。

「姉さんが三人いた。僕が十才のとき、大きい姉さんは十八才、次の姉さんは十六才、三番目は小学校の五年生であった」。<sup>\*29</sup>長姉と二姉のことがよく出てくる。

長姉は8歳年上で、追慕の念は大きい。

大きい姉さんは「小学校へ行くのがきらいだった」と父さんたちがよく言っていた。四年生がすんでもう学校をやめたが、それでいて非常に頭がよくて字もよく知っていた。

田んぼをするのがきらいで、その頃ではまだ珍しい「半物（洋裁）の仕立屋になる」と言って、小さいミシンを買ってもらって、けいこに通っていた。併し毎日はい行けず、田圃の忙がしいときは次の姉さんたちと手伝いをし、またゴザ（花菱）を織っていた。

少し太って色が白く、いつも髪を二百三高地巻き（前髪つきだす）を結っていた。寒い時分には僕と一緒にコタツに寝たが、寝床でよく「女子文壇」というむづかしいような字ばかりの本を読んでた。母さんは僕が勉強するのをあまり喜んでくれなかったが、この姉さんは母さんに代ってよく世話をしてくれ、とてもやさしいよい姉さんだった。<sup>\*29~30</sup>

小学校卒業のとき、悦太郎少年は優等生として校長から賞状と賞品を授与された。

家に帰ると大きい姉さんが一番喜んでくれた。「お前さんよかったな。それで優等賞をもらうとき、何番目に名を呼ばれた」と聞いたから二番目に呼ばれたと云ったら、「それあ、お前二番じゃが」といって大そう喜こんだり褒めたりしてく

れた。一年生のときからずっと僕の面倒をみて世話をして可愛がってくれた姉さんはまるで自分のことのように喜んでくれた。<sup>\*43</sup>

次姉は6歳年上で、同じく追慕の念は大きい。

次の姉さんは背が少し低く、髪は普通の束髪に結って、大きい姉さんのように家の仕事を手伝った。あい間には裁縫を習いに行ったり「表」を織ったりしていた。

これも優しい姉さんで、同じ村（長津）の女の友達と「少女の友」という雑誌を二人で買って、交わる交わる読んで、行ったり来りして仲良くしていた。夜本を読むとき、大きい姉さんと与野晶子がどうのこうのとよく言っていたが、その雑誌にでていた小説のことらしかった。

後にこの姉さんは、その友達の見さんのところへお嫁に行った。<sup>\*30</sup>

すぐ上の姉についての記述は少ない。

妹は5年生のとき7歳、6年生のとき1年生、弟は5年生のとき4歳であった。<sup>\*38~39</sup>すぐ上の姉がしていた妹・弟の守りをさせられた、ということを書いている。<sup>\*38</sup>もう一人一番下の弟がいたが、この弟のことは後に、高等小学校を病でやめて家で療養している頃、「末弟の守りなどしながら日々をすごした」と記している。<sup>\*45</sup>

なお、悦太郎は25歳のとき、家を弟に譲った。3反歩ばかり分けて貰い、小さい家を建てて分家した。<sup>\*\*30</sup>

## (2) 家業

生家の生業は農業で、副業としてと畳表・ゴザ織を行なっている。もちろん農間には、例えば雨の日には藁仕事をする。<sup>\*\*6</sup>

耕地は田7反歩、畑9畝歩で、自小作であるが、その内訳は記されていない。後に3反歩を分けて貰って分家するが、それからみて自作地が多かった



であらう。

7反歩の水田には稲、裏作に麦・藺草・蚕豆が栽培された。藺草<sup>\*\*11</sup> 1反歩、蚕豆<sup>\*\*4</sup> 1反歩と記されているので、麦は5反歩ということになる。

高等小学校を中退して家で養生している頃、「畑にもよくついて行って、いも類、大小豆、粟、そば、野菜類の耕作を手伝」った。<sup>\*45</sup> 9畝歩の畑では、藺草苗・麦・さつまいも・馬鈴薯・ササゲ・大根・ソバ・ゴマなどを輪作し、またゴボウ・ラッキョウ・落など作られる。<sup>\*\*5~6</sup> 大根には聖護院大根・練馬大根の名が出る。<sup>\*\*17</sup> また、日常よく食べるネギ・ナス・キュウリ・葉菜類は屋敷続きの菜園でつくられる。しもく（堆肥の山）の裾に土を寄せてユウガホ・カボチャを植える。<sup>\*\*5~6</sup> 一時は大麻を田3畝歩、畑1畝歩作付した。<sup>\*\*20~21</sup>

牛は飼育していないので耕耘は他にやってもらう。農具は、鍬、千歯、唐箕、などの類である。

物を運ぶには、天秤棒でかつぐのが主であった。ほかに猫車も使われた。<sup>\*\*18</sup>

肥料は、稲には大豆粕・ニンシ粕を使用するが、ニンシ粕は値段が高い。<sup>\*\*3, 9~10</sup> 即効性の肥料として多木とかいう会社のものが使われたというがよく知らないといふ。<sup>\*\*3</sup> そしてなによりも堆肥である。それは、川泥・藁・塵芥・草藁・川岸草を積み、そしてはきだめのごみも加える。<sup>\*\*5</sup>

後にみるように、幼少の時から母親が田圃へ行くときはついて行ったり、藺刈の場にいたり、父母の前の田圃での田の草とりを見たり、稲のずい虫取り、母の言いつけで近くの道端の田圃のえんどうちぎりということはして育ち、高等小学校は農業科で苗代づくりの実習をしたりしたが、農業に従事するのは1915（大正4）年、14歳のときからである。

## 4 こどもの生活

### (1) こどもの遊び

幼少の時の遊びの記録はつぎのごとくである。

私が小さい時は、近所に子供はいたが、みんな年の大きいものばかりで、遊ぶにもまた連れにしてもらえず、姉さんが学校から帰れば姉さんが遊んでくれたり、またよそへ連れて行ってくれたが、そのあいだは母さんのそばで一人で遊ぶことが多かった。<sup>\*10</sup>

姉さんが家でべんきょうを始めたので、ぼくももらっていた古い本をもってきて、姉さんが本を読むのをきいたり、自分も教えてもらったりして、字をおぼえたり書いたりした。

べんきょうをすまして遊びにつれていってもらった。姉さんの友達は二、三人いたので、いろいろな遊びをしていた。かくれんぼのときはぼくも仲間に入れてもらった。身体が小さいから狭い所でもかくれられるので、なかなか見つからなかった。終いにはみんなが心配して、「もう出ておいで」といったので出ていった。「あれ、あんなところにはいなかった」とみんながあきれていたが、ぼくはおもしろかった。<sup>\*11</sup>

姉さんたちがマリをついてあそんでいたのがあれが欲しいと母さんにいったら、母さんは綿を握ってきてヒメを紡ぐ車で糸をこしらへた。糸は太くて細いところもあったが、それをボロ布を丸めてその上に巻いてマリをつくってくれた。

マリができると、赤と青の糸で外がわをきれいにかがってくれた。僕は糸ができるのがめづらしかった。マリもきれいなものをつくってもらってうれしかった。<sup>\*11</sup>

父母が野良仕事をするときは、ついていく。

田圃へ行くときはついて行って、あぜみちをかけまわったり、田んぼの中にゴザをしいてもらって、古い本をみたり、オヤツを食べたり、時には昼寝もした。それでも春の田圃はよいが、夏の暑いときは困った。田んぼに水があるのではいることができず、堆肥のかげにカサをさしてもらってその下にゴザをしいて、ひとりであそんだ。

姉さんが学校から帰る頃には途中までむかえに行って、友達などと一しょに帰った。みんなが大事にしてくれて、時には負んぶしてやるというて、金田の方の姉さんがおんぶしてくれた。とてもその時はうれしかった。<sup>\*10~11</sup>

藺刈りとき、悦太郎はそばにいて作業をみる。

田圃のすみにコモで日除けをしてもらって遊んだ。

外へ出ると母さんは「帽子をかぶらねば病気になるぞ」と叱った。

夕方、母親が持ってきた握飯をイがらの上に敷いたゴザに腰をおろして、<sup>\*13~14</sup>みなで食べたおいしさを記している。

雷はこどもにとっては恐ろしいものである。その時の描写がある。

暑い昼、父さん母さんは前の田圃で田の草を取っていた。僕は家の軒下の涼しいところでひとり遊んでいた。するとにわかに黒い雲が金山の上から出て家の上の方まで広がって来たかと思うと、急にピカッと光ってバリバリとものがさけるような音がした。びっくりして家の中にとんではいったら大粒の雨が降って来た。雷さまは大きな音でゴロゴロなった。とんで帰った父さんは納屋から鋤を出してきて軒の下の中え刃を上にもつけて立てかけて、急いで家の中に入った。

母さんは足をふきふき、「お前、腹あてをしてるか、へそを出すな。とられるぞ」といって座敷に上って急いで蚊帳をつつてくれた。かやの中にはいってぢつと耳をふさいでいた。<sup>\*15</sup>

農繁期（田植時）には上級生は学校を休んでもよいことになっていて、次姉につれられて学校へ遊びにつれて行って貰ったこともあった。

ずっと小さいとき、田植えて田んぼで遊べないとき、次の姉さんに連れられて学校に行った。その頃は田植時には大きい子は学校を休んでよいことになっていた。小さかったのでおんぶしてもらったり歩いたりして行ったように思う。

学校は大きい人は休んでいるものが多かったが、低学年のものはみな行ってい

たのでにぎやかであった。教室に先生がいなかったのも、みんなは自由におさらいしていたので、大事にしてあそんでくれた。<sup>\*17</sup>

以上には、母親の傍らで一人遊びをしたり、野良仕事をする父や母の傍らで遊びまわったり、そして姉たちの仲間に入れて貰って遊ぶ様子が記されている。ここからは幼い時に母や姉たちから慈しまれて過ごしたことが伝わってくる。

また七夕<sup>\*15~16</sup>、お盆<sup>\*16</sup>、を家族一同で迎える様子や、荒神かぐらのときの恐い経験<sup>\*17</sup>、そして後にみるような宮詣でなど、多くのことがらに彩られている。

## (2) 宮詣

宮詣には、「母さんと三人の姉と一しょにお宮にまいった。両方から手を引いてもらって石だんをつまづきながら上って神様の前で、みんなのするように手をたたいた」生後2年4カ月のときのひもとおし、<sup>\*3</sup>「ある夜、母に背負われて、近所のおばさんたちと」行ったさんたばのお大師さま、<sup>\*3~4</sup>「母さんと近所のおばさんにつれられて」詣ったお地藏さま、<sup>\*5</sup>「父さんと小さい姉さんとまいった」長津の天神様、<sup>\*5~6</sup>「顔にできものがして、ある雨の降る日に父さんとカサをさしてはだしで」詣った市場の笠神様、<sup>\*6</sup>「父さん母さん姉さんと四人で」詣った中帯江の観音様とその近くの「イボ神さま」、<sup>\*6~7</sup>「秋のお祭りに父さんと姉さんの三人で」のお宮詣りなどと多くの記述がある。<sup>\*7</sup>

その一つ、吉備津神社の講詣についての記述は詳細である。

長津には毎年春と秋の二回吉備津神社の講詣りがあった。「悦も来年からは学校だから少し歩くけいこをしとかねば」と、父さんに連れられて吉備津さまえまいった。吉備津までは往復四里もあるので小さい（特に背が低かった）子供には無理であった。

途中肩車をしてもらって吉備津さまに着いた。長い廊下があった。ここは元気に歩いた。……



松は松で今はない  
左の祠も新木にかく  
道階もは見えない  
馬場の傍に石塔があるが別に書く

第2図 長津の天満宮 (佐藤悦太郎氏製作)  
註1) 佐藤悦太郎『長津と写真でみる古田』31ページ。  
2) 原図は彩色、本図は原寸の65%に縮小。

帰りみち、山陽線の近くで丁度汽車が来た。生れて始めてみた。それは長い貨物列車であったが、見えなくなるまで見送った。そして汽車に乗っている人は毎日のれるからいいなと思った。

三谷の坂を肩車してもらって矢尾の大池まで帰った。池の端の甘酒屋で甘酒をのんだ。のどがかわいていたのでとてもおいしかった。<sup>\*7~8</sup>

この宮詣りの多くは子の成長と健康を願う父母の願のあらわれであるが、それはまた、父母や姉たちとの深い絆となるものでもある。

### (3) 病気

顔のできものができたときは市場の笠神様へ詣でた。前の線香立てにある灰をできものにつけた。またそれを紙に包んで持ち帰ってつけた。<sup>\*6</sup>

病気に対しては母親は口やかましくいった。

母さんは夏になると口ぐせのように、「水を呑むな、腹あてをいつもとておれ」、そして「暑うても川へはいってばならぬ」と口やかましく言っていた。

これは役場からの注意もあったが、特に家ではやかましくいって叱られた。自分たちも伝染病で死ぬんでかつがれて行くのを見てはすなおに言うことをきいていた。

そしてご飯を食べたら梅干しを食べておけ、腹痛にならんからといって酸い梅干しをよく食べさせられた。また、隣の家では「ラッキョウ」を食べれば病気が寄りつかぬ<sup>\*14~15</sup>と、いってよくラッキョウを食べていた。

医師にも診察を受け、治療した。

寒いときカゼを引いて、なかなかよくならないので、母さんにおんぶしてもらって町のお医者に行った。

上の方はみな脱いで見てもらった。手を握ったり、胸をぼんぼんたたいて口をあけたり、いろいろして見た。先生はやさしかったがそれでも少しこわかった。

水の薬と粉の薬をもらったが、水の薬はあまくておいしかったが、粉の薬はとて苦くて、砂糖をたくさんまぜてのんだ。<sup>\*17~18</sup>

高等小学校に入ってから頭痛がはげしくなった

学校に通ってはいたが、五月の末頃から頭痛が度々して自分ながら困った。昼でも冷たい手拭を額にのせて寝て休まねばならなくなって、とうとう母と町の医者に行った。

医者二宮先生で家の者も時折り診てもらうし、また家の前の道を通して中庄村の方へ往診に行くのでよく知っていた。あちこちを診てもらって控え室で待っている間、母は他に患者がいなかったから先生としばらく容態やまた手当などもきいた。

水の薬と粉の薬をもらって飲んだが、薬をのんだ時はよいがまた悪くなってなかなかものようによくなれない。<sup>\*45~46</sup>……

そして、ついに退学して家で養生するが、

……読みかきはできるだけせぬようにのんびりと身を養うことだけを心がけ

て、末弟の守りなどしながら日々をすごした。

そしてよく神様やお大師さまに詣った。その時分近所のおぢさんや父は殆んど毎月児島の大師さまにまいっていたから、それについてまた一人でまいった。近くの三たばの大師さまには赤飯を重箱につめて持てまいった。

天神さま、吉備津さまや一の宮までも参って頭がよくなるようにと本気でお祈りをした。また母と岡山に行って祈禱者に封じてもらった。<sup>\*46~47</sup>

畑にもよくついて行って、いも類、大小豆、粟、そば、野菜類の耕作を手伝い、家ではなわをなうけいこをしたり、ぞおりの作り方を教えてもらったりして、すこしづつ体をきたえるかたわら仕事を覚えることにして、当分勉強は病気がよくなるまではせぬようにした。何でも早くこの病をなおさねばと懸命であった。<sup>\*48~49</sup>

## 5 学校生活・時代の投影

### (1) 学校生活

#### ①入学

1907（明治42）年4月に早島小学校に入学した。

その年の正月、雑煮で祝ったあとで、悦太郎は母親から、「おまえも八つになって、四月からは学校だから今までのようにあまえてばかりおらず、何でもひとりでするようにならねばいけないよ」と言われる。いままでは姉さんがやってくれたことを自分でやらなければならないと思った。<sup>\*20</sup>

入学が近づき、カバン、帽子、本、せきばん、鉛筆など一さいを買って貰う。毎日カバンに入れたり、出したり、本を読んだりして入学の日を待つ。<sup>\*21</sup>

そして入学の日となった。

入学式にはお父さんとハカマをはいて行った。入学するものも大勢いた。二階の講堂で式があった。泣いている子供もあった。

君が代をみんなで唱って、その後で、よく太って眼鏡をかけてた校長先生が何やら生徒の方や父さんたちの方へ向いて話をした（校長は杉浦直之丞といっ

<sup>\*24~25</sup>  
た)。

式のあと、教室に入った。担任は浜野先生といい、背の高い、眼鏡をかけた女の先生であった。

先生は「みなさんは今日から此の学校の生徒になったのですから、明日から元気でおいでなさい。この教室をわすれないように、そして仲良くおいでなさいよ」といつて、そのほかのことなどを話してくれた。父さんたちはみんな「よろしゅうおねがいします」といいながらおじぎをした。<sup>\*21</sup>

## ②学校の日々

このようにして始まった学校生活である。

あくる日から近くの大きい子といっしょに毎日通った。大きい人に連れが多かったのでやさしくしてもらえて学校へ行くのが楽しかった。

1年生のことは何でも知っていて、先生の質問は真先に手を挙げて答え、前に出て数を数えたり、字を書いたり、ときには父親から聞いた話などもしたので、みんながあきれていた。

外へ出てもよく駆けまわってあそんだ。身体が小さくてすばやくねずみのようになかけ歩いたのでネズミとあだなされていた。

学業はよく出来たが行儀が悪かった。悪いことはしなかったが、教室の中での態度が悪いといって先生にこの点はよくにらまれた。

通知簿は学科は全部甲であったが、操行が乙で、優等生にはなれなかった。<sup>\*21~22</sup>

3年生のとき、修身の時間に先生（女の伊丹先生）が何気なく教育勅語を知っているかと質問したのに対して、わけはわからないが読むことはできる、暗唱もできると大きな声で答えた。そして教壇に上がり皆の方を向いて、教育勅語を一気に暗唱した。先生も生徒もみなびっくりした。どのよう



に覚えたのかという問いに対して、5年生の姉が読んで暗唱しているのを聞いて覚えた、と答えて、先生を感心させた。<sup>\*23</sup>

「四年生になって少しは自分ながら今までとは変ったような気がして、真面目にやらねばならぬと思った」。そして3年間を振り返つた。この3年生の中頃の、教育勅語を暗唱して、受け持ちの伊丹先生がびっくりした後は、伊丹先生が非常に可愛がってくれた。「外ではよく『悦よ』『悦よ』と呼びすてにしたが、これが姉さんのような気がして、嬉しかった。それからこの先生の言うことをよく聞いてまじめに勉強した。『よくできるようになった』と言われるようになった」。<sup>\*32</sup>

操行もよくなり、4年生のときは優等賞を貰った。<sup>\*38</sup>

在学中に早島小学校の校地・運動場の拡張、校舎の建替えが行なわれ、その間、教室が不足して二部授業となったことが記されている。<sup>\*31~32</sup>

### ③さまざまの行事

学校にはさまざまの学校行事がある。

まずは、楽しいものは運動会と遠足である。

運動会は毎年の恒例の行事である。運動会は毎年秋の鶴崎神社の大祭の翌日（祭休み）に行なわれた。1カ月位前から練習をし、4、5日前に全部一通行なう下げいこを行なう。

運動会当日は、校門の内側にヤグラが組まれ、その上で楽隊が軍歌などを演奏する。にぎやかである。開会式は生徒全員が4列にならんで校歌を男女が交互に歌いながら入場し、校庭を一周して整列する。校長が高台に上り、先生が横両側に整列し、先生の号令で礼をする。「校長が何やら言っていたが小さい生徒たちにはよくわからなかった」。それが終ると生徒は両方に分れて裏にはいり、競技が始まる。

行なわれる競技は、徒競走、帽子取り、遊戯、舞踏などで、「その都度楽隊

がブカブカとはやすので一日中にぎやかだった」。

悦太郎は運動会は好きであったという。走りまわることが得意で、身体は小さいが、徒競走ではたいていその組では一番だった。帽子とりなどでは上手に逃げて取られたことはほとんどなかった。「まるでネズミのようでなんぼうにもかなわん」と言われた。

一番の得意は障害物競争であった。梯子を抜けたり、網を潜ることなどはとても早かった。見にきていた一番上の姉が、家に帰ってから皆に、悦太郎は出るときは号砲にびっくりして出おくれたが、半分ほどまわって前を通るときは他の子をずっと離して先頭だった、あきれた、<sup>\*24~25</sup>といった。

もう一つの大きい行事は遠足である。

遠足については、1年生の時の日間山、4年生の時の玉島養父ガ鼻、5年生の時の讃岐金毘羅宮、この3回について記している。それぞれ印象深いものがあつたのであろう。

1年生の時の日間山は春の終り頃であつた。弁当を風呂敷に包んで、背中に斜に負う。道々をがやがや楽しく話しながら行き、ちょっとした山の中の寺に着く。そこで昼食である。

……僕らは四、五人、石に腰をかけて、風呂敷から弁当を出して一つ二つ食べたとき、どうしたわけか巻寿しがコロコロと転がって土の上に落ちた。僕は後にまだあつたので「もうよいワ」といったら、そばで見えていた生徒がさを拾ってついていた土をなで落して食べた。その瞬間、僕はこの子は弁当を持てきていないなと思って、残っていた巻寿しを一つやった。その子は何も言わず軽くうなずいてそれをうけてうまそうに食べた。

どうしてあの子は弁当を持て来なかったのだろう。僕もとわずあの子も何も言わ<sup>\*22</sup>なかったが。

4年生の時の玉島養父ガ鼻旅行では、初めて汽車に乗った。倉敷の駅まで

歩き、そこから玉島駅までの一駅であった。

……窓から見る外の景色はめずらしく、目につくものはみな後へ後へととんで行く。長い鉄橋を大きな音をたてて渡ったかと思えばもう駅で下りなければならなかった。何だか物足りない感じがした。

一里ばかり歩いて養父ヶ鼻に着く。広い海を見るのも始めてであった（児島湾は見ていたが）。水島の海は広く、大小の船が往き来して眺めも素晴らしい。みんなと海辺の砂に坐って弁当を食べ、貝などをさがして遊びまわった。

家に帰ったらだいづつかれていた。が併し修学旅行はいつ、どこへ行っても楽しいものだ。  
\*32~33

5年生の時の遠足は讃岐金毘羅宮行きで、これまでに5年生ではなかった遠方への遠足である。前年に宇野線が開通したからこそである。宇野まで汽車で行き、そこから高松まで連絡船で、そこから汽車で行く。

清水校長を始め非番の先生も同行することになり、五月のある日早島駅から乗って、八浜のトンネル、そして連絡船と生徒たちにはめづらしいものばかりで、四国の汽車にのりかえて琴平に向っていた。

ところがはからずも大椿事が起きた。僕らの車両のデッキにいた二、三人が「オイM君が汽車から落ちた」と大声でさげんだ。みんなはびっくりしたが、窓が開かないので外を見ることはできなかった。

デッキで機械体操のようなことをして手が離れて落ちた、というのである。しかしすぐ起きて汽車の方に走ってきた、というので一応安心した。

琴平では、高い階段をあがって金毘羅様を拝礼し、境内で弁当を食べ、高い所から遠くの景色を眺めたり、土産店を見てまわったりした。帰途につき、高い階段を下っていると、中ほどで清水校長、石原先生、M君の三人が上がりてくるのに出合う。上がりていく三人の後姿を見て、本当によかったと思った。

走行中の列車から落ちたのにけがもなく元気なのは、奇跡というか、金毘

羅様のご利益といわざるを得ない、と記している。<sup>\*37~38</sup>

学校行事には祝日の式典などがある。

大事な儀式に祝日の式典があった。祝日のうちの 1月1日元旦、2月11日、11日3日は式があった。みな袴をはいて登校する。式は、君が代を歌い、校長先生による勅語の朗読がある。

……校長先生が白い手袋をして、箱の中から教育勅語を出すして、高く捧げいだただた。

先生の号令でみんな頭を下げた。勅語を読み終るともとのように頭をあげる。

続いて今日の祝日の話しをされて、祝日の歌を歌った。

祝日の歌は、1月1日の正月は、年の始のためしとて、終りなき世のめでたさを……、2月11日の紀元節・神武天皇即位日は、雲にそびゆる高千穂の高嶺おろしに草も木も……、11月3日の天長節・明治天皇の誕生日は、今日の佳き日は大君の 生れ給いし良き日なり……であった。

その他の祝日・記念日は1月3日の元始祭、1月30日の孝明天皇祭、3月10日の陸軍記念日、春分の日・春季皇霊祭、4月3日の神武天皇祭、5月28日の海軍記念日、秋分の日・秋季皇霊祭、10月17日の神嘗祭、11月23日の新嘗祭、これらは休日である。<sup>\*26</sup>

郷社である鶴崎神社の秋の大祭は全員で参詣する。

学校の生徒はみんな袴をはいて、先生に引率されてお宮に詣った。前の広場に全員が整列して、生徒の代表と校長とが石段を上って神前に行って敬礼する。それに合わせて先生の号令で敬礼した。

この日とあくる日のお練りの日には学校は休みであった。

また鶴崎神社は郷社ということで、郡役所から奉弊使が弊帛料をもって参拝していた。<sup>\*22~23</sup>

先生たちの送迎もまた一つの大きなことがらであったであろう。悦太郎は校長先生の見送りの様子を記している。

3年の秋に、京都の盲啞学校の先生となる杉浦先生の見送りがあった。そのとき、悦太郎たち3年生以上の生徒全員で山陽線の庭瀬駅まで見送った。

……みんなははかまをはいて、二列にならんで、先生につれられ、三谷の坂を越え、撫川の町を通り、庭瀬の町の東の端にある駅まで行った。早島からはかなりの道のりだった。

駅の東側の貨物の引込線の所へずっと長くなりたてで待っていた。だいぶ時間がたって汽車がきてとまった。

まもなく汽車は汽笛をならして動き出した。校長先生は窓から身体をのりだして両手を高く振った。生徒も先生の号令で、ばんざい、ばんざいと、みんな手をあけて見送った。校長先生の手は間もなく見えなくなったが、生徒は汽車が見えなくなるまでじっと見送った。

また三谷の坂を越えて帰ったが、家についた頃はもううす暗くなっていた。足もだる<sup>\*23~24</sup>かった。

#### ④先生たち、悦太郎の自覚

入学時の校長は杉浦直之丞で、よく太って眼鏡をかけていた。この杉浦校長は3年の秋、京都の盲啞学校に転任した。担任は浜野先生という背の高い、眼鏡をかけた女の先生であった。

3年生のときは女の伊丹先生であった。3年生の中頃の、教育勅語を暗唱してから、伊丹先生が非常に可愛がってくれたことなどはすでに記したとおりである。

4年のときは二宮先生で、学校を出たばかりの若い先生であった。運動会などへも巻ケートルで来ていた。読み方の説明でもどこかしどろもどろのところもあったが、その代り熱心であった。体操の時間には近くの国鉾公園につれて行き、体操したり休憩には自由に園内で遊ばせてくれた。活発で、そしてやさしいので生徒がよくなついて、言うことをよく聞き、勉強した。頓行の妙法寺に一人で下宿していたが、5、6人をお寺にさそい教えてくれ

た。学年末にはその全員が優等賞をもらった。<sup>\*36~37</sup>

5年のときの受持は石原先生であった。

6年のときは初めは林先生であったが、途中で東京へ行き、後任は馬場先生となり、6年の大部分教えてもらった。この馬場先生は、

……一寸見ると古い感じがしたが年は案外若かった。頓行の太田の神主の何とかで、そこから学校に来ていた。親しみやすい先生で、話などもなかなか上手であった。

遠慮のないところもあってお医者へ薬を取りに行ったり、また牛肉屋へ肉を買いに行くのを頼まれることが度々あった。

その当時、学校では先生たちの感想や作文などを集めて、『さくら』という本を年に何回が出していた。先生から「君たち和歌か俳句を作って見い」といわれてみんな面白半分にして出したが、その後の『さくら』に悦太郎の作品「おさな子の あちらこちらに手まりつく 顔ぞうれしき 元旦の朝」が載っていた。<sup>\*40</sup>

1912（明治45）年4月に6年生となった。悦太郎は上級生としての自覚をつぎのように記している。

六年生になって、今までとは違って只自分のことばかりでは済まされぬことになった。校外では部落の組長として部落内の生徒の一応の注意せねばならず、別けて小さい低学年には特に登下校時には注意してあやまちのないように、男の子のいたづらなどにも気をつけるなど、なかなか責任を感じた。

部落日誌があって変ったことは記帳して報告した。妹は一年生として学校に行くようになったが、幸い近所に連れがあり、また、家の前の通りを通る子供の中にも同級生がいたので余り心配はなかったが隣の男の子が一年で入学したので毎日つれていった。その子の母親が毎朝たのみますというので、親切に世話をしていた。

校内では六年生だから校内全般のことについてよく注意して、生徒の遊びなど

にも危険のないようにと言渡されて、なかなか骨が折れた。がみんなも今年が最後であるし上級生という責任感もあって、今までよりはずっと大人らしく、おとなしく下級生の面倒を見るようになった。<sup>\*39</sup>

1913（大正2）年3月に早島尋常小学校を卒業した。<sup>\*43</sup>そして4月開成高等小学校へ入学した。開成高等小学校は早島・妹尾・豊中州・福田の4カ町村立で、妹尾町箕島にあった。男子には商業科と農業科があり、悦太郎は農業科に入った。<sup>\*44</sup>

ここでは5月には近くの実習田で苗代づくりなどを体験している。<sup>\*45</sup>

5月の末頃から頭痛が度々した。小学校6年の頃からのものであったが、学校にも行けなくなり、結局は退学した。<sup>\*44</sup>

## (2) 時代の投影

### ①会社・工場

#### 「物産会社」<sup>(2)</sup>

父さんと町にいったとき「物産会社」を見た。そこには私のおばさんが仕事に行っていたので、中に入って見せてもらった。長い工場の中の両がわにゴザ機がたくさん並んでいて大ぜいの人がガッチャン、ガッチャンと大きな音を立て、赤や青の藁できれいな模様のゴザを織っていた。<sup>\*4</sup>

#### 帯江の銅山<sup>(3)</sup>

「金田の西側の山には帯江の銅山があって高い煙突から毎日けむりを出し、ガラランガランと大きな音をさしていた」という帯江の銅山を、帯江の観音、その近くの「イボ神さま」に詣った帰り途に見物したときのことをつぎのように記している。

……西の谷にヨーヨーロがあって人が働いていた。赤く焼けたドロドロのかすを、小さいツボのついている手押車を受けて、離れた処へ運んで行ってひっくり返す。カルメ焼のようなものができた。

中ほどの山には高い煙突があって煙を出していた。そばに行ってみると、こちらへ倒れてくるように思われた。

東の山では高いヤグラが建って、その下の横に機械室があって、そこからロープでヤグラを通して深い地の底から水をくみあげていた。毎日、ガラランガラランといっているのはこの音だった。<sup>\*6~7</sup>

## ②電灯・電話

「明治四十一年早島に始め〔て〕電話が開通して、全国の何処にでも通話ができるようになった」と1908（明治41）年に早島町に電話が開通したことを記している。<sup>\*20</sup>

「大正二年始めて電灯がついた。併し町筋だけ（一二八灯とのこと）。一応町すぢはランプ生活から開放されたが、田舎はまだまだ」と、1913（大正2）年に電灯が点ったこと、ただしそれは町筋だけで、農村部はまだランプによる生活であることを記している。<sup>\*20</sup>

## ③宇野線開通

「明治四十三年六月には宇野線が開通し、早島駅が設けられて交通が便利になった」。<sup>\*20</sup>

鉄道開通前は往き来は歩くことが基本であった。往復4里もあり「途中肩車をしてもらって」吉備津神社に詣でたり、小学校3年の秋に京都の盲啞学校の先生となる校長の杉浦先生を3年生以上の生徒全員が山陽線の庭瀬駅まで歩いて行って見送った、というように、とにかく歩くことであった。

人は殆ど歩いた。乗り物といえばこの地方では、

- 1 自転車がようやく一部の人にのられるようになった。
- 2 人力車が早島の町の東西に二ヶ所溜り場（待合所）があって、常時数台駐車して客を待っていた。客は有福な老人に婦人、そして土地に不案内の者が多かった。



時には五台、六台と連ねた嫁入りや芝居の役者の町まわりがあった。これは珍しいので人々は立ち留まって見ていた。<sup>\*18~19</sup>

開通した宇野線には早島駅が設けられた。<sup>(4)</sup> 宇野線開通の日の様子をつぎのように描いている。

宇野線が開通した。早島町民はもちろん沿線の人が待ちに待った宇野線が遂に開通して汽車が走り出した。

開通式には町の人はみんな仕事を休んで喜び祝った。駅前の広場や駅筋の通りは一パイの人で、露天もあちこちに出て、汽車がつく毎に大さわぎをした。中には踊りを踊り歩いているものもいた。

僕も駅まで見に行った。大勢の人で汽車はみな満員で、乗っている人は窓から手をだしてバンザイをする。見物人もこれに应へて一斉に万才万才と手を挙げて見送った。

友達の中にはお父さんお姉さんたちと汽車にのって宇野や岡山へ行ったものもあった、が僕は行けなかつた。併し早く乗って見たいなあと思った。<sup>\*33~34</sup>

宇野線の開通はこどもたちの遊びにも大きく影響を与えた。流行った汽車ごっこの様子をつぎのように記している。

汽車ごっこがはやり出した。宇野線が開通してから急に汽車ごっこの遊びが盛んになって、学校でも町や村のあちこち到處で見られた。

学校の上級生は汽車のよく見える上の運動場で、ワラナワで輪をつくって、五、六人が一組になり、大きいものが機関車ということで先頭になって、上り下りと何組にも分れて走りまわった。

下の運動場では小さい生徒に、時には女子の大きい生徒もまじって、ヒモや細いナワでわらをつくってあそびまわった。

家へ帰って小さい子の守りをするときも「汽車ごっこをしょう」とひもでわをこしらえて、ヨチヨチの子供までが汽車ゴッコをした。<sup>\*33~34</sup>

## ④日露戦争

日露戦争の凱旋祝の様子をつぎのように記している。

ロシアとの戦争に勝ってそのがいせん祝があった。提灯行列といって赤い小さい提灯をもって練り歩いた。

お宮や町は提灯をもった人でごった返していた。父さんに肩車してもらって提灯をもって見に行った。どこもかしこも人が一ぱいで、赤い提灯を振りながら「日本勝った、日本勝った、ロシアまけた」「まけたロシアがまたまけた」と大声でさけびながら練り歩いていた。中には男が赤い女の着物をきて踊っているのを見て、町中で喜び祝っていた。<sup>\*7</sup>

日露戦争勝利の影響はさまざまであった。

日露戦争に勝ってから軍人の人気が高くなった。子供たちのあこがれの的となつた。軍人による学校などでの戦争の話を、大勢が聞きにいく。演習を見物に行く。そして軍歌が流行った。岡山に師団ができて益々人気が高くなった。<sup>\*19</sup>

娘たちの間で二百三高地巻が流行った。<sup>\*19</sup>

演習がたびたび行なわれたが、金山（今のゴルフ場）にはよく演習を見にいった。大人も仕事を休んで見に行った。「旅順の攻撃に参加した国司中佐が学校にきて話しをしたときは大ぜい聞きに行った。中佐たちの部隊はその夜早島に泊ってあくる日倉敷の方へ行だったが、小学校の生徒は下野の県道の傍にならんで見送った。中佐は大ぜい部隊をつれて馬の上から拳手の礼をされた。ところどころにいた将校は長いサーベルを抜いて肩にあてゝ答礼してくれた。とても格好よかった」。<sup>\*28~29</sup>

そして、小学生に戦争ごっこがはやり出した。1910（明治43）年、4年生の秋に陸軍特別大演習が一宮～玉島間であり、明治天皇も倉敷で観戦、早島にも大勢の軍隊が宿泊、ますます流行った。<sup>\*29</sup>

## ⑥明治天皇の逝去、大正天皇の即位

1912（明治45）年7月30日に明治天皇が逝去した。先生から夏休みになるが、あまり騒がぬように、家では国旗に黒い布をつけて樹て、生徒も喪章をつけるようとの注意があった。9月になって新学期が始まったが、みな胸に蝶形の喪章をつれて登校した。大葬の儀は9月13日に行なわれた。小学校の上の運動場の式場には町長はじめ町のえらい方や一般の町民、そして6年生全員が参列、日暮もうな暗くなった頃、大葬の儀が行われる時刻にあわせて全員が東方に向って最敬礼をした。<sup>\*40~41</sup>

大正天皇の即位式は1915（大正4）年11月10日に举行された。それを記念したいいくつかの行事が行なわれた。

京都で行われる式典にあわせた奉祝の式が小学校校庭で10日に実施された。5日間「家業どめ」となったが、この期間中は奉祝の行事、余興が連日あって町内は賑やかであった。とくに10日の夜の町筋の賑わいはすごかった。記念植林が青年団長津支部によって行なわれた。畑岡東の荒れ地2反歩を20年間借り受けてのものである。

5日間の「家業どめ」で仕事を休まなければならなかった。「農家では稲刈りの時期で農家は半分程刈っていたが、みんな五日間の休みで田圃には一人の人影も見られなかった。自分たちのように遊びたい半分のものにはほんとうに御大典はありがたいと思った」、と記している。<sup>\*\*36~37</sup>

## ⑦第一次世界大戦

1914（大正3）年6月28日勃発の第一次世界大戦に参戦して青島を占領したが、その凱旋祝が行われた。にぎやかな提灯行列があり、町の学校の先生が歌を作って生徒と一緒に町を練り歩いた。<sup>\*47~48</sup>

## 6 村人の生活

### (1) 衣食住

飲食物については普通の食事については記述がない。出てくるのは見ていた藺刈りの時に母親が持ってきたおにぎりである。コギリマといい、おかずはコーコ（香の物）やうりやなすである。おいしかった、と記している。<sup>\*13</sup>

普段のおやつは、煎りもち米・黒豆の砂糖まぶし・煎り蚕豆・煎り麦からはったい粉・小米白ひき団子などと記している。<sup>\*11~12</sup>

お正月の餅は鏡餅・豆餅・かきもち・団子と多く、雑煮を食う。餅類は平常の日もよもぎのでる時節は草もち、五六月かしわ餅・牡丹もち・おはぎ・流し焼<sup>\*12</sup>と工夫する。お盆のときに食べた「ごもくめし」<sup>\*19</sup>のおいしさが残っている。

物産会社に行ったときに働いていたおばからのテッポウ玉（あめ玉）<sup>\*4</sup>、母親に連れられて行った船本の地蔵で貰ったおせったいのせんべい<sup>\*5</sup>、荒神がぐらで撒かれたお菓子<sup>\*17</sup>、吉備津神社の帰りの茶屋での甘酒<sup>\*8</sup>、みな記憶に残っている。

伝染病が流行ったとき、ご飯のときに梅干、らっきょうを食べろといわれたこと、雨に濡れて帰ったときに炊いてくれたいも<sup>\*27</sup>、仮病で学校を休んだときに母が作ってくれた片栗<sup>\*28</sup>、も同様である。

修学旅行の弁当の巻き寿司も家で作ったものである。<sup>\*22</sup>

農業をやるようになってから、畑作物を副食、間食とする。蚕豆・蚕豆<sup>\*\*4~5</sup> あん、カモキチ、そばがき・いも<sup>\*\*6</sup>、栗餅・大豆・きなこおにぎり<sup>\*\*7~17</sup>などである。また、沢庵漬・切干大根をつくる。<sup>\*\*15</sup>

田植がすむと「代みて」をする。「代みて」では寿司をつくって食べる。材料は魚屋が売り込む魚（ヒラ）と有合せの椎茸・かんぴょう・高野・旬じゃがいもである。<sup>\*\*9</sup> 稲の収穫が終り粃摺りがすんだ後、新米での赤飯を炊き、神棚に供え、また粃摺りに使った道具にも供えた。<sup>\*\*18</sup>

入団した青年団の懇親会は5月、鯛のよく取れる頃、50銭と白米1升の会費であったが、驚くほどのご馳走であった。盃を交し賑やかに過ごした。楽しかったと記している。<sup>\*\*35</sup>

衣類についての記述を拾うとつぎのようになる。

小学校に入学する年の正月、悦太郎は母から、自分でするようにといわれ、これからは襦袢・股引・足袋・着物・三尺帯・前掛<sup>\*20</sup>を自分でしようと心掛けるが、<sup>\*20</sup>これらが普段着である。袴は入学式、<sup>\*21</sup>見送りのときなどに着用する。<sup>\*24</sup>

青年団に入った年、大人らしくということで、袂の着物、大人の帽子を整えた。<sup>\*\*32</sup>

祭時には、悦太郎は新しい着物・絹の三尺、姉たちはきれいな着物・帯・下駄、そして妹・弟は新しい着物・履物を買ひ揃えた。<sup>\*\*19</sup>

大人の盛装は袴羽織である。幼い日、宮祭りのとき、赤い鬼がやってきたとき、父親の羽織の後をめぐって姉と二人でかくれたこと、<sup>\*7</sup>入学式の日、父と二人で袴をはいていったことなどが記されている。<sup>\*21</sup>

雨の日の登校のとき、高下駄を履き、カサをさして、という記述があるのみで、<sup>\*25</sup>履物ほかは具体的ではない。

住宅についての記載はない。家のなかの照明は、電灯はまだなく、カンテラ・ランプ・ローソクである。<sup>\*8</sup>

夜間の外出時の照明は携行する提灯である。月の光の無いときの夜道は暗く、この提灯が頼りである。どこの家にも提灯が、二つ、三つはあり、<sup>\*8</sup>家紋を書いた提灯があった。<sup>\*18</sup>

1913(大正2)年に早島町に電灯がついた。町場だけで、この畑岡あたりはいつ頃なのかについては記していない。<sup>\*20</sup>

## (2) 物売り

先ほどの食についての記述から、食料は主食、副食、そして間食などかなりの物を自家生産で賄っていたことが伺えた。

消費生活に必要な物で自給でない物は購入する。町場の商店での購入もあるが行商、そして渡り職人が廻ってくる。その様子をつぎのように記している。<sup>\*9</sup>

トーフ屋 桶をかついで鐘を鳴らしながら「アゲ、トーフ」といって毎朝きた。

八百屋 乾物・駄菓子・果物売 籠をかついで二人が交代のようにしてまわってきた。「今日はいらんかナー」。

魚屋 二人が二日おきぐらいにきた。「こんちゃよろーし」。

桶屋・鋤掛屋 道具箱をかついで時折りやってくる。

屑屋（ボロ買） 大きな籠にインド袋などを入れて、ボロ類をかいに来る。古布切れや紙屑、金物、髪毛、何でも買う。

床屋 白い前掛けして、小さい道具箱を下げて、時々まわってきた。髪長のびているような子を見つけてはいつて来る。私はいつもは丸坊主にそっているが、母さんが剃るとカミソリが切れないので、痛くて痛くて時には泣いたこともあった。

床屋に剃ってもらうときはうれしかった。併し荒い遊びをして頭に砂やゴミをよくかぶっていたので、床屋さんが剃刀がきれんとこぼしていた。

髪結さん。白いエプロンをして小さい包をかかえ頭にすぎぐしを差して、ちょっといい格好をして髪結さんが時折りくる。母さんや近所のおばさんが時々結ってもらっていた。

なお、悦太郎は物貰が多く巡ってきたことを記している。

物売りもよく来たが、また物もらいがよく来た。

ここは東から西へ一列に家が並んでいるので、物売りにも都合がよいが、物貰が歩くのにも便利がよいらしく一日に多いときには何人もやってきた。

余りよく来るので村の人は、「こう大勢来られては、こっちが貧乏してしまう」といって、物貰いが入って来かかると「おことわりです」といってことわった。また入口の戸を閉めてしまう家もあった。

しかしほんとうに気の毒そうな人には普通にめぐんでいた。

時には元気そうな大男が来て、「飯をたべさしてくれ」などといわれるときには、女たちは恐ろしい<sup>\*10</sup>といっていた。

物貰いが来ることには、その存在をも含めていくつかの条件があるが、この頃、農村を廻ったのは、そこに村人の確かな生活があったからである。

#### 註

- (1) 早島町については、『岡山県大百科事典 下巻』1980年 山陽新聞社 534～535ページ、『角川日本地名大辞典 33 岡山県』1989年 角川書店 911～913ページ。なお、『早島の歴史』全4巻 第1巻は1997年・他は1998年度 早島町。
- (2) この「物産会社」は早島物産合資会社であろう。同社は、1894（明治27）年設立、1900（明治33）年解散の早島物産会社を受けて、1900（明治27）年4月に設立されたもので、1911（明治44）年に解散し、早島物産商会となった。早島物産合資会社はこの間、41万7640本、356万5800円を生産した（拙稿「主要蘭業地早島町における蘭莖業」『岡山大学経済学会雑誌』第29巻第4号 78ページ）。
- (3) 帯江鉱山は倉敷市帯江にあり、明治末期から昭和初期にかけて藤田組（同和鉱業株式会社に合併）によって稼行されたが、廃山となった。黄銅鉱、方鉛鉱、閃亜鉛鉱を採掘し、一部は現地で精練を行なった（『岡山県大百科事典 上巻』529ページ）。
- (4) 『山陽新聞』1910（明治43）年6月13日には前日6月12日に催された国鉄宇野線の各駅での開通式の模様が報じられている。早島町については、早島駅の構内中央に長さ8間の竿頭が立てられ、そこから蜘蛛手に引かれた綱に小国旗が、また構内にも小国旗が掲げられたこと、駅前には「祝開通」と記された花筵による高さ3間の大緑門が張られ、駅から市街までの120間には小国旗、提灯が吊られ、早島小学校児童の習字が掲げられたこと、町内各戸軒先に国旗が翻り、一般休業したこと、駅前には清酒3挺を備えて無料で公衆に供せられたこと、駅の東では自転車競争があり、汽車の発着ごとに花火が打ち上げられたこと、夜には青年団員による国旗及び提灯行列が行なわれた筈であること、などと記している。